「幸せ」に必要なもの

氏名： 濱本　智恵美　　学校名： みなべ町立上南部小学校
担当教科： クラス担任　　実践教科： 総合的な学習の時間、家庭科
時間数： 10 時間　　対象学年： 5年生　　人数： 37人

１．教師海外研修を通して感じたこと

実際に自分でネパールを見て、体験し、生のネパールを知ることができた。テレビやインターネット、書籍等で私が知っているよりもネパールの人々が全体的に幸せそうだったのが印象的だった。反面、カースト性やジェンダー差別の問題などが慣習として未だ色濃く残っており、人々が疑問視しないという所に問題の深さがあることも感じた。学校によって教育格差が激しいことや、貧富の差がどうしてそこまであるのか体感的にも知ることができた。また、特別支援教育について、人生をかけて取り組み、人々のために成果をあげている方々のお話を伺ったことも深く感動したことのひとつである。日本とは全く違う支援が必要なことも知ることができ、どの分野においてもその国の文化や歴史、時代背景等を知ることが大切であると再確認した。

これらの学びを通し、知って、考え、そして行動し、「自分の生き方」そのものについて児童ひとりひとりが自分と向き合い、自分の小さな行動のひとつひとつが将来の日本と世界を変えていくのだ、という壮大なテーマに向けた授業実戦に取り組みたいという思いを、以前にも増して強く持つようになった。

２．授業実践

【１】テーマ・目標

テーマ：「幸せ」ってなんだろう？
目　標：自分自身の生き方と向き合う。
　　国際社会が抱える課題を知り、考え、行動しようとする態度を培う。

【２】設定の理由

本校では、ほとんどの児童が家庭的にも経済的にも恵まれている。また社会的な問題や暴力を伴うような争いもほぼ無いと言える。そのため、日常の暮らしの中で生活が困難な人や、命が危ぶまれるような状況に置かれている人が現実にいるということを想像するのが非常に難しい。
児童は、国際理解を取り上げる開発教育に非常に関心が高い。1学期から続けてきた開発教育の授業でも、ほとんどの児童が主体的に学び、模範的な解決方法を自ら発表してきた。しかし、実際その模範的な解答方法の通りに行動できるかどうかは別問題であることにも気付き始めている。

「幸せ」ってなんだろうというテーマは非常に壮大で、考えれば考えるほど奥が深い。日本人同士でも意見が異なり、ゆっくりと討論したい教材である。

これまで日本で非常に恵まれた環境にいる児童が持ってきた「幸せ」を見つめて向き合い、開発途上国の子どもたちが考える「幸せ」と比較することにより、人として生まれた以上、最も幸せなことは「生きることができる」ことであると気付かせたい。先述の通り、本学級の児童にと

って、生きるために必要なものが十分以上に満たされていることは当たり前である。そのため、国際社会が抱える問題も比較的容易に解決できると考えている。よってこの単元でもう一度、「幸せ」について深く掘り下げて考えることにより、文化や環境による考え方の違いや、国際社会の課題解決には多くの矛盾を乗り越えなければならないことに気付かせたい。そして、5 年生なりに一生懸命考えを出し合い、実生活の中で自分はどのような生き方を選択し行動するのかを考えさせたい。またそれが、自ら次の課題を見つけ取り組むことにつながり、ひいては将来の生き方に生かされることを願っている。

【３】展開計画（全１０時間）

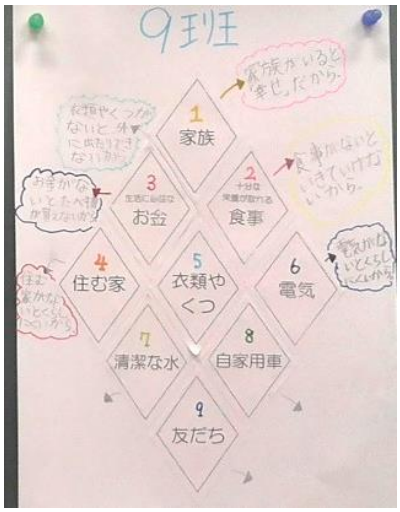
時限･「テーマ」･＊ねらい	方法･内容	使用教材
１限目 「ネパールを知ろう①」 ＊ネパールの暮らし･文化にふれる。	○フォトランゲージをする。 ・カトマンズの道路や寺院、ホームステイ先の村の様子や暮らしを捉えた写真を見て、日本との違いを見つける。 ・写真から読みとれることについて想像し、意見を交流する。 ・ネパールから持ち帰った民族衣装や、楽器、食べ物などで異文化を楽しむ。	・ネパールの写真（教師海外研修中に撮影したもの） ・クルタ・楽器など ・ネパールで買ったジュース・お菓子　【資料１】
２・３限目 「ネパールを体験しよう」 ＊ネパールの暮らしを知る。（食を通じて）	○ダルバートを作って食べる。 ・家庭科の調理実習でダルバートを作って食べる。 ・現地の人に教えてもらった食べ方を体験する。（右手で食べる。）	・現地で食べたダルバート、それを食べているネパールの方々の写真 ・ダルバートの材料・レシピ
４限目 「ネパールを知ろう②」（クラスの保護者であるゲストティーチャーによる授業） ＊ネパールの暮らしを知る。（文化を通じて）	○チャイを飲む。 ・ネパールで毎日飲まれているチャイを飲む。 ○お香をたく。 ・写真で見たネパールの寺院や、宗教的な集まりでたかれていたお香を体験する。 ○ネパールの山岳地帯の暮らしを知る。 ・シェルパ族の暮らしを知り、同じネパール国内でもカトマンズとはずいぶん違うことを知る。	・ネパールの写真 （シェルパ族、エベレスト、寺院等） ・チャイ ・お香
５限目 「『幸せ』ってなんだろう①」 ～リナくんの幸せ～ ＊世界の子どもたちの「幸せ」について考える①	○ネパールのごみ山で働くリナくんの話を読む。（児童が「町の図書館で借りた。」と持ってきてくれた『わたしは 10 歳、本を知らずに育ったの』から。） ○リナくんの「幸せ」について考える。 ・リナくんの立場に立って、グループでダイヤモンドランキングを作る。	・『わたしは 10 歳、本を知らずに育ったの』からの抜粋文 ・ワークシート（大）
６限目 「『幸せ』ってなんだろう②」 ～クラスの友だちの幸せ～ ＊クラスの友だちのことを知る。	○日本で暮らす私たちの「幸せ」についてグループで考える。 ・ダイヤモンドランキングを作る。 ・作ったランキングを発表し、意見交換をする。	・ワークシート（大）
７限目 「『幸せ』ってなんだろう③」 ～私の幸せ～ ＊現在の自分の生活・現状を見つめる。	○自分の「幸せ」についてのダイヤモンドランキングを作る。 ・前時にグループで作ったダイヤモンドランキングに基づき、自分のランキングを作る。 ・日本で暮らす私たちの「幸せ」基準を共有する。	・ワークシート
８限目 「『幸せ』ってなんだろう③」 ～幸せの基準～ ＊世界の子どもたちの「幸せ」について考える①	○フォトランゲージをする。 ・いろいろな国、状況下に置かれた子どもたちの写真を見て、それぞれの子どもが望んでいる「幸せ」について想像し、交流する。	・いろいろな国の子どもたちの写真･映像（カカオ農園で働く子ども、スラムのごみ山で働く子ども） ・『わたしは 10 歳、本を知らずに育ったの』からの抜粋文

9 限目 「『幸せ』ってなんだろう⑤」 ＊「幸せ」に必要なもの	○満たされている日本の子どもたちと、開発途上国の子どもたちの「幸せ」基準の違いについて考える。 ・日本の子どもの「生きること」に対する思いと、途上国の子どもが持つ「生き抜くこと」に対する思いの違いに気付く。 ○「幸せ」になるためには、まず何が必要かを考える。 （清潔な水、最低限の食料、安全な住居、等） ・ランキングを作る。	・ワークシート
10 限目 「今後の生き方について考える。」	○自分たちは恵まれている日本の子どもであり、開発途上国には貧しい子どもたちが大勢いることに気付く。 ○食べられない子どもたち＆捨てる子どもたち、食料事情の違い、「もったいない」について考える。コンビニゲーム等、知って考え、葛藤する教材で学ぶ。 ・不平等な世界において、自分はどのような生き方をするのか考える。	・食料自給率問題 ・「もし地球が 100 人の村だったら」 ・コンビニゲーム　　等

【授業実践から】

グループで交流しながらランキングを考えまし

友だちが考える「幸せ」とは…？



第 6 時にグループで相談して作った「私の幸せ」ランキング

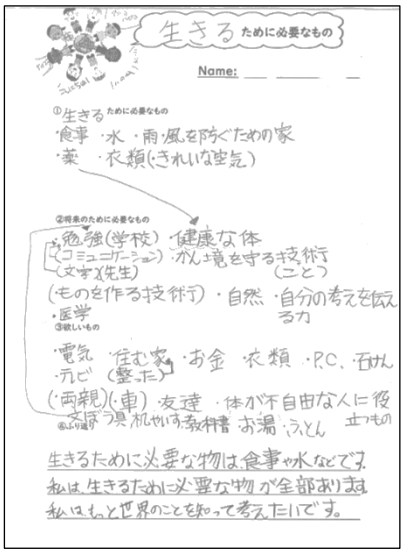
３．成果と課題

児童は、いろいろな国の子どもたちの暮らしを学び、生まれてきた人間にとって結局一番大切なのは「命」であり「生きること」であるという事に気付くことができた。自分たちにできる国際協力についても学び、全校児童や保護者、地域の方々に対し発信も十分できた。ここまでで、小学 5 年生としては十分な成果である。しかし、日本の中でも特に恵まれていると感じられるみなべ町のこの地域（上みなべ地域）において世界の現状をしっかり伝えるためには、もう一歩踏み込んだ学習をしておきたいと考え、単元の終わりに葛藤教材を扱った。そうすることにより、課題を表面的に捉えてしまっている児童や、課題に対して模範的解答を述べてしまっていた児童も、きれいごとではなく「自分は実際にどう

いった選択をするのか。」「どう生きていきたいのか。」というところにまで思いを巡らせる入り口に立つことができたと感じた。しかし、大人にとっても葛藤の多い「生き方の選択」について考えることは一部の５年生児童にとっては難しすぎたため、教材の提供方法については改善が必要だと考えられる。

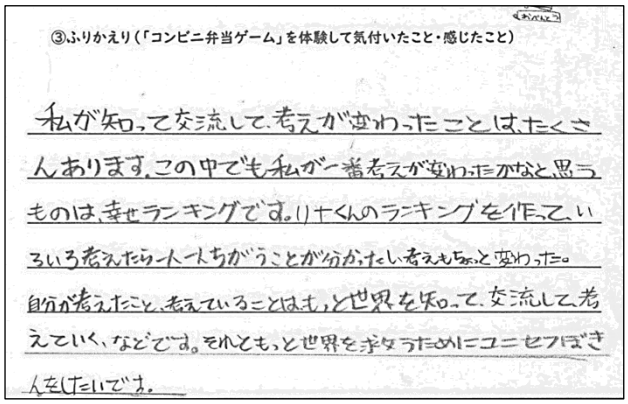
【単元を通した児童生徒の反応・変化】

↓第９時　授業後のふり返りから



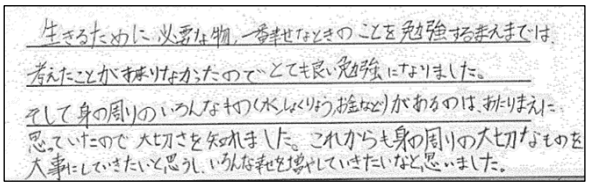
↑生きるために必要な物は食事や水などです。私は生きるために必要な物が全部あります。私はもっと世界のことを知って考えたいです。

↓第１０時　授業後のふり返りから



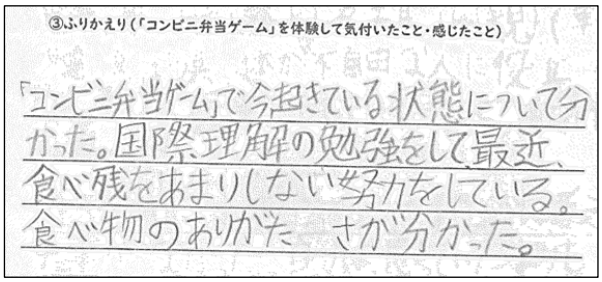
↑私が知って交流して考えが変わったことは、たくさんあります。この中でも私が一番考えが変わったかなと思うものは、幸せランキングです。リナくんのランキングを作って、いろいろ考えたら一人一人ちがうことが分かったし、考えもちょっと変わった。自分が考えたこと、考えていることは、もっと世界を知って、交流して、考えていく、などです。それともっと世界を救うためにぼきんをしたいです。

↓第９時　授業後のふり返りから



↑生きるために必要な物、一番幸せなときのことを勉強するまでは、考えたことがあまりなかったのでとても良い勉強になりました。そして身の周りのいろんなもの（水、しょくりょう、お金など）があるのは、あたりまえに思っていたので大切さを知れました。これからも身の周りの大切なものを大事にしていきたいと思うし、いろんな幸せを増やしていきたいなと思いました。

↓第１０時　授業後のふり返りから



↑「コンビニ弁当ゲーム」で今起きている状態について分かった。国際理解の勉強をして最近、食べ残しをあまりしない努力をしている。食べ物のありがたさが分かった。

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲】

〈単元学習後に行った募金活動後の作文から〉

・今日は野菜の収穫が多かったので全部売ることはできないかなと思っていたけど、全部売り切れました。だから私は、みんなが、世界の貧しい人たちを少しでも助けるために心を込めて売ったからだと思いました。野菜を売り終わった後に、みんなが出してくれた 100 円などを見て、この 100 円が世界

中の命を救うと思ったらすごくうれしかったです。もし、お店などに置いている募金箱に、お店に来た人全員が 100 円を入れて、そういう募金箱を全部のお店に置くと、世界のほとんどの人が笑顔になるのかなと思いました。次は、世界には、そんな貧しくて困っている人がいるということを、もっとたくさんの人に知ってもらえたらいいなと思いました。（児童Ａ）

・今、世界では 5.6 秒に 1 人の子どもが命を落としています。そんな子どもを 1 人でも救うために、今日、野菜を売りました。私は、買ってくれた人は全員分かってくれたと思います。知ったと思います。今の世界を。そして、8 時間かけて水をくみに行く子、ゴミをあさる子の気持ちを。今日、私は水菜担当でした。水菜は 3,700 円で、全体の売り上げは 18,350 でした。このお金で、学習セットを 1 セット、ワクチン 1,350 回分、栄養治療食を約 502 個買えます。これで、栄養治療食だと 502 人もの命が救えます。私はもっとユニセフの事、私たちとちがう子どもの事など調べて、もっと気持ちをあげたいです。今日もまだ募金はしてないけど、気持ちは伝わったと思います。きっと届いたはず。（児童Ｂ）

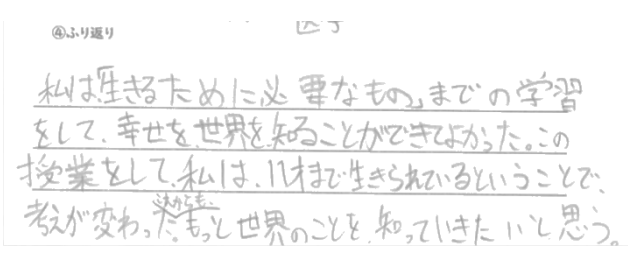
【途上国・異文化への意識の変容】

（授業前）

開発途上の国々について、そのような国があるということを知ってはいたが、自分とは無関係であった。「自分は日本に生まれたからよかった。」という単純な考えで終わっている児童が多数見られた。

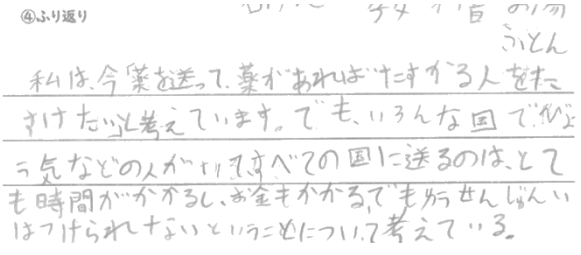
（授業後）

世界には自分たちが知っている欧米諸国以外にもいろいろな国があり、それらの国々の中には、自分たちが想像もできないような困難な生活を送っている人たちがいることを知った。知ったことにより、考えようという意欲がわき、みんなで考えを出し合った後は「じゃあ、自分たちにできることは何か。」と具体的に考え、行動に移そうとする姿勢が見られた。1 学期にもユニセフの学習はしていたが、2 学期は開発途上国について教師の体験も交え、より具体的に学習できたため、全ての活動が上辺だけでなく、深い思いを伴うようになったように感じる。


④ふり返り

私は生きるために必要なもの」までの学習をして、幸せを世界を知ることができてよかった。この授業をして私は、11才まで生きられているということで、考えが変わった。もっと世界のことを知っていきたいと思う。

↑私は「生きるために必要なもの」までの学習をして、幸せを、世界を知ることができてよかった。この授業をして、私は、１１才まで生きられているということで、考えが変わった。これからも、もっと世界のことを知っていきたいと思う。


④ふり返り

私は今薬を送って、薬があればたすかる人をたすけたいと考えています。でも、いろんな国でびょう気などの人がいてすべての国に送るのは、とても時間がかかるし、お金もかかるでも、ゆうせんじゅんいはつけられないということについて考えている。

↑私は今「薬を送って、薬があればたすかる人をたすけたい」と考えています。でも、いろんな国で　びょう気などの人がいて、すべての国に送るのは、とても時間がかかるし、お金もかかる。でも、ゆうせんじゅんいはつけられないということについて考えている。

【授業を終えて】

1. 苦労した点	1学期から開発教育を進めてきて、この学年の内にどこかの時点で葛藤教材を扱いたいと考えていた。そこで、教師海外研修での学びを期に、本単元の最後に葛藤教材を投げ入れてみた。ある程度の混乱と理解しにくい児童がいることは想定していたが、生活経験がまだたった11年しかない5年生の児童にとっては想定以上に難しい問題だったようである。授業を展開するにあたり、他教科の学び（社会科、家庭科、国語科）の理解度に左右される場面もあった。それぞれの児童がそれぞれ自分と向き合い、自分から世界へと視野を広げていくことを期待していたが、そこにまで至らない児童もおり、手立てが適切でなかったと感じている。
2. 改善点	授業を展開するにあたり、自己の様々な課題も見えてきた。何より児童にもっと十分な時間を与え、落ち着いて深く考える環境を整えた上で学習すべき内容だったと反省している。国際協力についての課題は大人も多くの矛盾点に悩み、自らの生き方や国際社会との関係について葛藤するところである。急がず、ゆっくりと時間をかけて、児童と共に引き続きこの難題について向き合う学習を進めていこうと考えている。
3. 成果が出た点	ほとんどの児童が、自分とクラスメイトの考え方や感じ方の違いを実感できていた。得た情報を分類したり関連づけたりして考えながら、クラスメイトたちとそれぞれ異なる意見を交換できたことで、事象に対する見方や考え方を広げることができた。本学級の児童は小学1年生からずっと同じクラスで学習しているが、「○○さんのことを初めてちゃんと知ったような気がする。」や「自分と違うもっと他の人の考えを聞いてみたい。」等といった言葉もしばしば聞かれた。低学年からトラブルが続いていたクラスでもあったため、これは、今まで周りに理解されにくかった児童にとっても、担任にとっても、喜ばしい流れとなった。その上で、国際理解教育を進められたことは非常に有益であったと感じている。また、いろいろな国に対して興味を持ち、自主学習で調べ学習をしてきたり、自分ができることについてまとめてきたりする児童も増え、その内容から国際的な課題を自分の生活と結びつけて考えられるようになったこともうかがえた。
4. 備考	本学級では、1学期からユニセフ活動を中心とした開発教育を進めており、「自分たちで作った野菜を売って、他の国の困っている子どもたちの役に立ちたい。」という児童の願いのもとで学校畑での野菜作りを進めてきた。担任が教師海外研修に参加した後は、ユニセフ募金の活動だけでなく、いろいろな支援の方法があることを共に学んだ。今後、さらに学習を進める中で、児童が自らの日常生活と開発途上国とのつながりや国際協力の必要性をより強く感じられるようになることを期待している。

参考資料：

〈書籍〉

・わたし8歳、カカオ畑で働きつづけて。―児童労働者とよばれる2億1800万人の子どもたち
・わたしは10歳、本を知らずに育ったの。アジアの子どもたちに届けられた27万札冊の本・世界がもし100人の村だったら
・世界と地球の困った現実　まんがで学ぶ開発教育
・未来を変える目標　SDGｓアイデアブック
・身近なことから世界と私を考える授業

〈映像資料〉

・教師海外研修で撮影した動画・写真
・カカオ農園で働き続ける兄弟
・ネパールにあるゴミだらけのスラム街が凄かった
・JICAの教育協力
・ユニセフ提供のDVDから100円の旅　等